



羅針盤

2017年度 第12号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

2017（平成29）年11月22日発行

「赤本」の活用法

10月初旬に今年度の赤本等がほぼ入った。赤本等といっても、多くの種類の問題集が出ているので、ざっとそれを紹介しよう！

教学社の「赤本」 駿台の「青本」（共に各私大の過去問・センター過去問など）
河合塾の「黒本」（センター過去問） などである。

① これらをやの意味

言うまでもないが、問題の傾向を把握し、問題形式に慣れるというのが第一の意義である。もう11月に入ったが3年生の中には、いまだに苦戦という人がいると思う。くじけるなかれ！現役はまだまだ伸びしろがある。赤本を手に取り出願校の出題の雰囲気にとりかかっても大きな意味がある。

② 何年分くらいやるべきか。少なくとも過去5年分、第1志望、第2志望はできればそれ以上やると良い。

③類題（＝繰り返し出ている似たような問題）と問題形式を研究する。初めて見ると、超難問でできるはずがないと思っても、過去に似たような問題が出ていて対策をたてておけば、なんなくこなせる場合もある。解答の説明を入念に読み込み、年度ごとに出題項目を一覧にしてみると類題や傾向がより明確になる。解答解説は赤本より、駿台の青本の方が分量が多くより詳しい。（但し、赤本の方が掲載年度が多い。）

④「捨て問」＝誰がやってもできない問題、つまり点数を取らせない問題を素早く見抜く訓練もするべし。特に私立の難関校の問題には社、理で捨て問が仕込まれている。あせらず、「捨て問」をさっと捨て、とらなければいけない問題に注意を集中する感をやしなう。数学では、とらなければいけない大問と捨てるべきものとは確実に見分け、また部分点をもらえるには、どこまで書けばいいかを判断する力をつける。

⑤どの問題からやるかを瞬時に決める判断力を養う。特に国語などがそう。問題を解く順番は極めて重要。

⑥専用のノートを用意して、わかれば、配点なども書く。時間を測って解ければそれがよい。解けなければ、現段階では時間にこだわる必要なし。但し、理系は別。理系の科目は時間を測って解くことを勧める。

⑦センターの過去問はやるべきか。当然やるべし！！どれくらい？できるだけ多く！特にセンターの追試は私立対策用に極めて有効。追試は本試より難易度が高いので、私立対策の正誤問題用などに役立つ。予備校などで直前に追試を徹底的にやらせるところもあり・・・だが・・・追試は手に入れにくい・・・河合の「センター対策過去問の黒本」が追試が一番多く掲載されていると思われる・・・

⑧どうしても過去問が手に入らない場合は東進の過去問データベースなどを使用すると良い。結構、使っている受験生は多い。東進は掲載年の多さ（1995年からの過去約20年分の入試問題を掲載）では圧倒的である。ただし、閲覧には登録が必要。他にパスナビ、マナビジョン、スタディーサプリなどがあるが、どれも掲載年度が3年～5年分と少なく、国公立に限定される場合なども多い。

★ 最後に過去問をやることも大切だが、学校の授業で使用しているもの、教科書、副教材、プリントなどの反復練習も忘れてはならない。この時期だからこそ、基礎力の再確認が必要である。

学校の勉強は必要か（文理選択に向けて）

先日、教育関係者ではない知人と話をしていた際、最近放送されている某局のテレビドラマのことが話題に上った。私はそのドラマを観たことはなかったが、それは学校教育をテーマにしたもので、人気アイドル扮する民間人校長が生徒にこう質問をされる場面があったという。

『英語は将来役に立ちそうだから分かるけれど、古文や物理の勉強って何の役に立つんですか？その知識、いつ使うんですか？』その質問に、民間人校長はしどろもどろになっていたらしい。そして、こんな時に現職の先生だったらどう答えるんですか、とその知人は私に聞いた。

このような問いかけは、おそらくすべての教員が一度はされた経験があるものだろう。形式的な答え方—たとえば、よい大学に入ればよい仕事に就くことができ、安定した暮らしをすることができる、もしくは今は分からなくてもいつか勉強しておけばよかった、と思う日が来る、のような類のもの—ならすぐに用意できるとしても、大方の生徒が納得できる明快な論拠を持つ答えを提示するのは難しい。上記のような言い方では、そもそも相手が大学への進学や学問的な知識を要する仕事に対して価値を見い出していない場合、答えを示したことになるからだ。そして、教科ごとの専門性から説得を試みるのは、さらに困難なことになる。物理の授業で大きな比重を占めるニュートンやガリレオ・ガリレイの知識はすでに発見から数百年が経過したものであり、文語文法が使用されている古文の教材に至っては、その大半が千年以上昔の文章だ。英語にしても、近年のAI技術がもたらす自動翻訳の正確性は驚くばかりであり、近い将来人間のそれを上回ることは想像に難くない。それでは「未来を生きるために必要かどうか」という視点からは、学校の勉強というのはその価値を証明することができないのだろうか。

実はこのテーマについては、国の教育施策という見地からも研究の必要性が指摘されている。京都大学の溝上慎一教授が書いた『どんな高校生が大学、社会で成長するのか』という本には、高校2年生から約10年間にわたってその後の人生を追跡する「トランジション(移行)調査」の事例報告と、その分析から見えてきたことが述べられている。詳細は省くが、結果は「授業外学習や課外活動を含め、**高校時代に主体的な学習体験を多く積んできた生徒の方が、そうでない生徒に比べて、その後の人生のあらゆる領域における満足度が高かった**」というものだったらしい。そして注目すべき点がもう一つある。主体的な学習体験を行う対象となるもの—つまり文系・理系・実技科目のどれに力を注いだのか、—ということは、ほとんど結果を左右する要素にはならなかった、ということだ。

つまり、この分析から導き出される「学校の勉強で重要なこと」とは、「**将来使えそうな知識を得たのかどうか、ではなく、知識を得ようとした体験そのもの**」だということになる。これ以外にも興味深い考察が載せられている。それは「一般入試学生に比べ、AO入試で入学してきた学生はおおむね高い学習意欲を持ち、大学での授業、ひいては大学卒業後の進路に対する親和性(馴染みややすさ)が高い」というものだ。確かに「進路実現という目的に向かい、自己評価を繰り返して課題解決を図っていく」というAO入試のプロセスには、究極の能動学習といえるような所がある。安易な道だと揶揄されることも少なくないが、自分が将来こうなりたい、という到達目標に立脚して自己を客観的に把握する能力—「メタ認知」を身につけるための学習、—という見方をすると、自ずとその価値は変わってくるだろう。以上のことをまとめていくと、教科学習や入試と言った個別の事柄は「手段」にすぎず、中核にある「目的」となるものは「**未来を希求し、自分自身で動くこと**」だという答えが見えてくる。そして、この関係性は大学で学ぶ意義として挙げられる「**帰納的(抽象的)思考力を身につけること**」という理念の同心円上に位置するものだ。文系に進むか、理系に進むのか—その判断の際に重要なのは、結果として得られる知識というよりも「**いかなる領域での知的体験をしたいのか**」。シンプルに考えよう。それは常に、正しい答えをもたらしてくれるはずだ。(遠藤)